

雑誌『Japon et Extrême-Orient／日本と極東』 と1920年代フランスにおける日本学の萌芽

La revue *Japon et Extrême-Orient* et les débuts
de la japonologie en France dans les années 1920

クリストフ・マルケ
Christophe MARQUET

最初のフランス語の日本専門誌

雑誌は、両大戦間におけるフランスの日本に対する知識の実態を調査する際、きわめて貴重な一次資料である。当時フランスでは、学問・芸術・文学あるいは政治の営みはこの種のメディアを中心に展開していたからである。本稿では日仏会館設立当時の1920年代半ばに時期を限定し、定期刊行物としては『*Japon et Extrême-Orient. Revue d'informations politiques, économiques, artistiques et littéraires*／日本と極東－政治・経済・芸術・文学情報誌』の一誌に的を絞って扱うことにする。1923年12月から1924年12月までの間、巻数にして全12号（配本10回）の短命に終わった本誌は、その質の高さ、極めて野心的な編集方針にも関わらず、現在その知名度は低い。日仏会館図書室では今回のシンポジウムを機に、本誌全12号を蔵書に加えさせていただいた¹。

まずは、19世紀末以降に登場し、日本に特化したフランス語の最初の雑誌を紹介したい。主要なもので3誌が存在する。ひとつは、当時日本政府の法律顧問であり、刑法の起草者でもあった法学者ギュスターブ・エミール・ボアソナードが創刊した『*Revue française du Japon*／佛文雑誌』である。本誌は1892年から1897年の6年間にわたり、フランス語に長じた大学教授たちが設立した仏学会の後援で発刊され、発起人の中には、パリ中央工芸学校（エコール・サントラル）に留学し、後に日仏会館の理事長を務めることになる古市公威もいた。本誌は、1889年に創立された和仏法律学校（法政大学の前身）に所在し、主要なフ

1 当雑誌及び後述の三誌に関しては、Patrick Beillevaireが綿密な精査を行ない、各論文のリストを以下の著作に収めている。Patrick Beillevaire, *Le Japon en langue française. Ouvrages et articles publiés de 1850 à 1945* (Société française des études japonaises, Editions Kimé, 1993).

ランス人寄稿者としては、エマニユール・トロンコワ²、フランスにおける日本学の創始者のひとりであるノエル・ペリー³、東京フランス公使館の通訳官モーリス・クーランらが名を連ねている。クーランは、その後1919年、「アンスティチュ・フランセ」（日仏会館の構想段階の名称）の日本での設立をめざして、フランス国民教育省がリヨン大学総長ポール・ジュバンに命を託した大学使節団のメンバーに選出されている。

次に挙げる雑誌は『*Mélanges*』（1906年に『*Mélanges japonais*』と改題）であり、1898年に神父ノエル・ペリーが神田に開いた日本初のフランス書籍を扱う書店・三才社を発行元とし、1904年から1910年にかけて年に4回発行されていた。ノエル・ペリー自身も、パリ外国宣教会の他の神父たちと共に、熱心な寄稿者のひとりであった。『佛文雑誌』も『*Mélanges*』も東京で発行され、全てフランス語で書かれた雑誌である。『佛文雑誌』はとりわけ日本でのフランス語普及に貢献することをめざしていた。そのため両誌の発行部数はフランス、日本共にかなり限定的であったと思われる。とはいえ、内容的には質も高く、フランス語を常用する読者に日本の政治、社会、文学、歴史の分野のみならず、時事問題や公式統計に関しても正しい情報を提供する最初の試みとして両誌共にここで言及するに値する雑誌である。

この『*Mélanges*』は、基本的には宣教師を対象に、日本の新聞・雑誌や学術誌の情報や論説の仏語翻訳を掲載し、その目的はといえば、一次資料をもとにして、主に宗教、哲学分野、その他にも科学、政治経済の領域においての日本人の知識がいかなるものかを伝え、それによって当時「日本人が考え、述べていたことについての十分に明確なビジョンを提供する」ことにあった。

そして、三つ目の雑誌は、1902年から1932年にかけてパリで発行されていた『*Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*／パリ日佛協会会報』である。パリ万国博覧会開催年である1900年の9月16日に設立されたパリ日佛協会は、学者や社交家の集まりであり、フランス駐在の日本人外交官や、日本美術愛好家、財界人、学者、著名な文化人をメンバーとし、年1回発行の会報は、主として講演の掲載、会の活動報告を目的としていた。当会は、設立当初には、ジャポニズムの延長線上にあってかなり芸術的な方向性を持っており、その副会長にはエミール・ギメ、ジークフリート・ビング、レイモン・ケ克蘭、エドゥアール・メヌといった錚々たるコレクターたちが名を連ねていた。会員数は1905年には約200人、1928年には約350人を数えた。本稿でも追って取り上げる日本学者クロード＝ウジェーヌ・メートル(1876-1925)も、亡くなる数か月前の1925年3月17日に当会の事務局長に就任している。

『日本と極東』の企画

『日本と極東』は、前述の三誌に比べ、より総合的な編集意図を掲げ、発行部数も多く、したがって本誌をもってフランス国内初のフランス語による日本専門の雑誌であると考えて

2 当雑誌に関しては、以下を参照。Iwatani Jûrô, « La publication de la *Revue française du Japon* (1892-1897) : l'infructueuse tentative d'un juriste français, conseiller auprès du gouvernement japonais » in Berthon, Gossot, *Japon Pluriel* 3, 1999, p. 45-52 ; 白鳥義彦「明治期の日仏関係と『佛文雑誌』」『日仏教育学会年報』6号, 1999年, p. 45-56 ; Christophe Marquet, « Emmanuel Tronquois (1855-1918), un pionnier des études sur l'art japonais. Sa collection de peintures et de livres illustrés d'Edo et de Meiji », *Ebisu*, n° 29, 2002, p. 129-133.

3 『日本と極東』誌上でクロード＝メートルがノエル・ペリーについて訃報記事を書いている。Claude Maitre, « Un japonologue français : Noël Peri », *Japon et Extrême-Orient*, n° 4, mars 1924, p. 289-307.

いいだろう。これほどの雑誌を月に一度のペースで発行することは野心的な賭けであり、第一次世界大戦後のフランスにおいて日本が新たな注目を浴びていたことを示している。

本誌を発案したのは、若く優秀な日本学者セルジュ・エリセーエフであった（図1）。エリセーエフは共産主義に転じたロシアで投獄された後、1921年2月に祖国を逃れフランスに亡命していた。その痛ましい体験を綴った『赤露の人質日記』は、パリに着いてすぐに日本語で直接書きおろされ、『大阪朝日新聞』紙上で連載された⁴。当時の彼はギメ美術館の研究助手を務めながら、駐仏日本大使館の通訳として働いていた⁵。1908年から1917年にかけて日本に三度滞在し、東京帝国大学では日本の文学と美術を学び、東京の文壇や歌舞伎界とも親交があったため、当時のパリにおいては、同時代の日本とその文化について最も精通した人間の一人として抜きん出た存在だった。1923年には著作『現代日本絵画小史』を発表しているが、前年に国民美術協会主催のサロンの一環でグラン・パレで開催された日本近代画家のフランス初の展覧会にあわせて出版されたものである⁶。

1923年夏、エリセーエフが日本専門誌創刊のアイデアをもちかけた人物は、フランス極東学院長を務めた後（1908年～1920年）、ギメ美術館の副館長に就任したばかりのクロード・メートルだった⁷。20世紀フランスにおける日本学の開祖のひとりであるクロード・メートルは、パリ高等師範学校出身、哲学の教授資格試験の首席合格者で、ハノイのフランス極東学院に勤務する以前、アルベール・カーン奨学金を得て、1898年に初めて日本を訪れていた。10年以上におよぶインドシナ滞在中（1902年～1913年）にも、長期派遣の形で幾度となく日本に滞在（1902年、1903年、1904年、1905年～1906年、1909年）し、その間に日本という国に見事に精通し、美術、歴史に関する造詣を深めていたのである。

こうして1923年12月1日（図2）、メートルを主幹に『日本と極東』初号が、エドモン・ベルナル出版社から創刊された。本誌寄稿者の中核でもあった編集委員会は5名で構成さ



図1 『赤露の人質日記』（1921年刊）掲載のセルジュ・エリセーエフの写真と自署

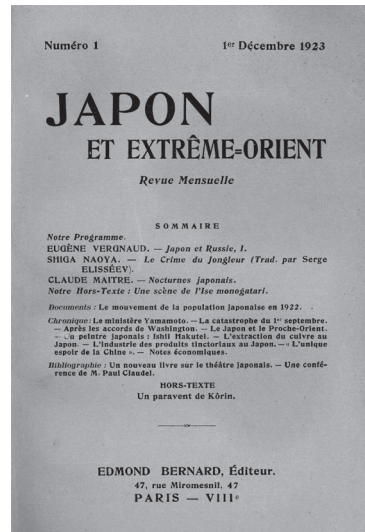


図2 『日本と極東』創刊号、1923年12月1日発行

4 『大阪朝日新聞』1921年7月～10月まで10回にわたり連載。後に単行本として出版。エリセーエフ『赤露の人質日記』大阪、朝日新聞社1921年10月。

5 エドウィン・O・ライシャワーによるエリセーエフの詳細な伝記が存在する：Edwin O. Reischauer, « Serge Elisséeff », *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 20, n° 1-2, juin 1957, p. 1-35.

6 Serge Elisséeff, *La peinture contemporaine au Japon*, Paris, E. de Boccard, 1923（英利世夫著 現代日本絵画小史）。

7 Serge Elisséeff, « Un japonologue français : Claude-Eugène Maitre », *Artibus Asiae*, vol. 2-1, 1927, p. 49-57.

れていた。日本学者のエリセーエフとメートルの他には、高等師範学校出身で哲学者の詩人ポール＝ルイ・クーシュがいた。クーシュは、日露戦争時、やはりアルベール・カーン奨学金で日本を訪れ、滞在中にメートルとも知己を得ていた⁸。クーシュは著作『*Sages et poètes d'Asie* / アジアの賢人と詩人』(1916年刊)でフランスに初めて俳諧を紹介し、20年代のフランス俳諧運動に決定的な影響を及ぼした人物である⁹。編集委員の他二人は、元・駐日フランス大使館付き海軍武官であり、夏目漱石の作品をフランスで最初に翻訳したレイモン・マルティニヤ、第一次世界大戦以前にすでに日本をテーマに、国際関係、日本人移民、浮世絵に関する書物を何冊も上梓していたルイ・オベールである。つまり本誌の寄稿者たちには皆、20世紀初頭に比較的長期の日本滞在経験があり、彼らが得意とする分野が主として日本の文学、美術、歴史であったとしても、彼らの企画はそれよりもはるかに広範だった。

本誌の「発行の趣旨」¹⁰に目を通せば、そこには1920年代初頭の日仏関係の状況を理解するための材料が提示されており、大いに理解の助けとなる。つまり創刊者たちにとって本誌は「日仏両国の接近のために貢献すること」を意味しているのである。それまでフランスの日本への関心は芸術に集約されてはいたが、確かに「フランスが日本に抱く親近感」は昔も今も非常に強いものであった。日本においては、フランスの影響力は法学、武力、芸術の分野では成果を発揮されていたものの、1870年の敗戦以降、「アングロサクソンの支配力」が増大するなか低迷していた。しかし、日英同盟(1902年締結、1923年8月に失効)の解消によって、アジア太平洋における地政学的均衡のカードは切り直され、日本は「突如、欠如してしまった友好と支援の手をアングロサクソン圏外に」見出すよう方向転換を促されるのである。1918年のフランスの勝利は日本における威光を回復させ、「我々の言語を学習しようとする非常に明白な動きが生まれた。友好的日本人は東京にMaison de France [フランス会館：日仏会館の構想当初の名]を設立する計画を立て、日本政府もこの計画を支持している」。「両国の接近」の機運が高まる中、『日本と極東』としては、「本能的な共感はあるが十分な知識が伴わない国、日本についての印象記や冗文、研究論文、資料、事実、つまりできるだけ多くのできるだけ正確な情報、評価材料」をフランス読者に提供する意図があった。目標は、日本の政治・経済・科学・歴史・美術・文学の営みを幅広く扱い、「日本の思想」を明らかにすることであり、そのために日本人に発言の機会を出来るだけ多く与え、資料の翻訳や分析を掲載する形をとる。さらには、日本に対する理解の助けとなる場合には中国や極東諸国の情報も随時取り入れるというものである。

本誌の重要な寄稿者として注目すべきもうひとりの人物として、当時、パ



図3 日仏会館の最初の研究員モイーズ＝シャルル・アグノエル、1925年奈良にて

8 柴田依子『俳句のジャポニスム―クーシュと日本文化交流』角川書店2010年37-40頁参照。

9 本書の1924年の4版で増補されたアナトール・フランスの序文は『日本と極東』2号(1924年1月)にも掲載された。『明治日本の詩と戦争―アジアの賢人と詩人』(金子美都子、柴田依子訳、みすず書房1999年)という邦訳がある。

10 « Notre programme », *Japon et Extrême-Orient*, n° 1, 1er décembre 1923, p. 1-5.

りの東洋語学校で日本語・中国語・マレー語を学び、高等研究実習院を卒業したばかりで、民族誌学研究のための来日を間近に控えていたモイーズ＝シャルル・アグノエル（図 3）についても触れておこう。アグノエルは、学生時代に、マルセル・モースを始め、当時の東洋学の最高権威であるシルヴァン・レヴィ、マルセル・グラネ、ポール・ペリオ、アンリ・マスペロに師事している。アグノエルは 1926 年 1 月には日仏会館の最初の研究員となり、フランス学長シルヴァン・レヴィの秘書も務めた。本誌のために翻訳したものの中には、志賀直哉と森鷗外の短編二篇がある。

日仏会館設立前夜、1924 年 11 月 20 日、アグノエルは「太平洋における紛争、中国内戦と日本政治の現在の傾向」というタイトルの興味深い記事を東京から送っており、その中で次のように記している。「日本は今、これまで以上の熱心さと共感をもって我々の社会の営み、知的・芸術的活動に関心を示している。この動きに我々が答えられないわけにはいかない。そのためには、この国民をもっとよく知るべきである。これまでは時に甘ったるく時にナイーブにこの国を褒めそやしていたが、そういう態度はこき下ろす態度にもつながりかねない。これまで我々が日本を知るすべは、非常に見事ではあるが部分的に時代遅れの書物（ラフカディオ・ハーン）や、言語道断の誤謬に満ちた話（日本は「芸者の国」）、あるいは明らかに共感に欠ける小説（『キモノ』）に限られていたが、もはや改めるべきである」¹¹。『日本と極東』がどれほど強い意志を持って、トップレベルの日本の専門家の協力を得ながら、それまで通俗文学を通じてフランスに蔓延していた日本に対する偏見やステレオタイプを打ち破ろうとしていたかを理解させられる一文である。

同時代の日本文学の翻訳

『日本と極東』の目的のひとつに、当時はまだ日本の文学について「非常に表層的で受け売りの情報」しか持ち合わせていなかったフランスで「古典から同時代までの日本文学をより深く周知させる」ことがあった。事実、フランス語で書かれたものでは、1910 年に出版されたミシェル・ルヴォン著『*Anthologie de la littérature japonaise des origines au XX^e siècle* / 古代から 20 世紀までの日本文学詩文選』しか存在せず、扱うのはちょうど明治時代までで、近代文学に関しては非常に簡単な紹介で終わっていた¹²。そこで本誌は、1909 年から 1923 年までに書かれた主要作家の短編 12 篇という形で、同時代の日本の文豪の初のフランス語翻訳を掲載し、その後、彼らが国際的名声を得るきっかけにもなった。これらの作品の選択、翻訳、紹介の手腕たるや見事というべきであり、その中心にセルジュ・エリセエフがいたが、彼以外にもシャルル・アグノエルやレイモン・マルティニ、さらには当時パリに滞在していた詩人・翻訳家の堀口大学が存在もあった。前述のように、エリセエフは明治 40 年代に、東京の文壇とのつきあいがあり、とりわけ友人の小宮豊隆を通じて、漱石

11 Moïse Haguenauer, « Le conflit du Pacifique, la guerre civile en Chine et les tendances actuelles de la politique japonaise », *Japon et Extrême-Orient*, n° 11-12, novembre-décembre 1924, p. 383.

12 近代を扱った日本文学史の最初のフランス語の研究書はジョルジュ・ボノーが日仏会館の研究員時代（1932 年～1939 年）に準備した主要な二作である。Georges Bonneau, *Bibliographie de la littérature japonaise contemporaine*, « Bulletin de la Maison franco-japonaise », t. IX, n° 1-4, Tôkyô, 1938 ; *Histoire de la littérature japonaise contemporaine (1868-1938)*, préface de Kikuchi Kan, Paris, Payot, 1940.

の自宅で開かれていた木曜会にも顔を出していたのである¹³。エリセーエフはそこで例えば、芥川龍之介、森田草平、永井荷風らと親交を結んだ(図4)。彼が『日本と極東』誌上で、質の高い翻訳で紹介しようとしたのは、まさにこの日本での滞在時に「リアルタイムで」発見した同時代文学だった。その作品選定の的確さには驚かされるが、その選択眼は、漱石や鷗外といったすでに古典と目され、鬼籍に入ったばかりの巨匠に対しても、永井荷風や長谷川如是閑といったすでに地位を確立している文豪に対しても、志賀直哉、谷崎潤一郎、里見弴、菊池寛、あるいは『中央公論』誌上で発表後わずか数年で「山鳴」と「雛」の短編の翻訳が本誌に紹介された芥川龍之介といった次代を担う作家に対しても共通して発揮されている¹⁴。

エリセーエフは確かにパリにいながらにして『中央公論』や『新小説』といった主要な文芸誌や、1921年5月に出版された評論家・高須梅溪の『近代文芸史論』といった最新の文学史の本を読んでおり、『近代文芸史論』に関しては『日本と極東』誌上で的確な長文書評を展開している¹⁵。また別の記事では¹⁶、『三田文学』、『早稲田文学』、『白樺』並びに1923年1月に創刊されたばかりの『文藝春秋』についても言及し、さらには「プロレタリア作家」の流れにも触れながら、次のように結んでいる。「我々は日本文学を、現在、最も活き活きとした文学のひとつと見なすことができる。ニッポンの作家たちは世界文学において重要な位置を占めるにふさわしいと思われる」。なお、こうした作家の紹介文には、文体に対してエリセーエフが高い関心を寄せていたことが見てとれる。

『日本と極東』誌上で掲載されたエリセーエフの全て



図4 セルジュ・エリセーエフと小宮豊隆、1909-1914年頃東京にて

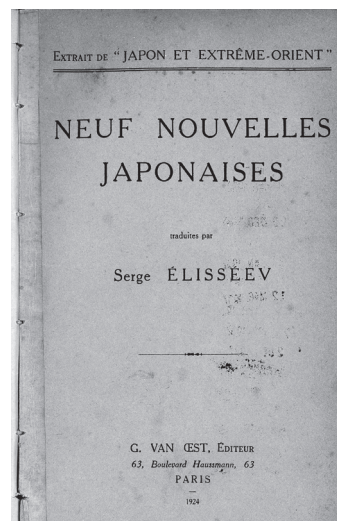


図5 セルジュ・エリセーエフの翻訳による『日本の短編小説9篇』1924年刊

- 13 倉田保雄『夏目漱石とジャパノロジー伝説—「日本文学の父」は門下のロシア人・エリセーエフ』近代文芸社2007年。本書によると(p. 50)、エリセーエフと漱石の最初の出会いは1909年6月24日にさかのぼる。その後(同じく本書p. 56-58 / p. 191)、漱石は自身が主宰する『朝日新聞』文芸欄において、エリセーエフにロシア文学の論評を依頼している(1909年12月～1912年2月の間に7回掲載)。
- 14 本誌上で翻訳された作品は次のとおりである。夏目漱石(『行人』の第一編「友達」1912年)、森鷗外(「高瀬舟」『中央公論』1916年1月掲載)、長谷川如是閑(「象やの衆さん」『中央公論』1921年1月掲載)、永井荷風(「狐」1909年、小説集『牡丹の客』1911年収録)、志賀直哉(「范の犯罪」小説集『寿々(すず)』1922年収録、「老人」1911年2月短編集『夜の光』1918年収録)、岡田八千代(「三日」小説集『絵具箱』1912年収録)、谷崎潤一郎(小説集『刺青』の第一編1911年)、菊池寛(「島原心中」小説集『道理』1921年収録)、里見弴(「川波の音」『中央公論』1921年1月掲載)、久保田万太郎(「はつ夏」小説集『雪』1913年収録)、芥川龍之介(「山鳴」『中央公論』1921年1月掲載、「雛」『中央公論』1923年3月掲載)。
- 15 Serge Elisséev, « Une histoire de la littérature japonaise contemporaine », *Japon et Extrême-Orient*, n° 3, février 1924, p. 281-288.
- 16 Serge Elisséev, « Panorama de la littérature contemporaine au Japon » (juillet 1925): 谷崎の戯曲「愛すればこそ」(1922年)の翻訳(仏題: *Puisque je l'aime*)に続いて掲載された一文 (Editions Emile-Paul frères, 1925, p. 153-161)。

の翻訳作品は、1924 年に短編集『*Neuf nouvelles japonaises*』（『日本の短編小説 9 篇』）にまとめられ、近代日本文学に関するフランス初の刊行物として Van Oest 社から出版された（図 5）。また、彼が日本で親交をもった同時代作家 6 人（荷風、谷崎、森田草平、志賀直哉、長谷川如是閑、新井紀一）の翻訳を収録した一冊『*Le jardin des pivoines par Nagai Kafû ; suivi de cinq récits d'écrivains japonais contemporains*』（『永井荷風の「牡丹の客」と、日本の現代作家の短編小説 5 篇』）が 1927 年に出版されている。

当雑誌の文学的な質の高さは、日本で購読していたクロードルの目に留まらないわけはなかった。クロードルはその点を取りわけ高く評価し、1925 年、外務公務員休暇で帰国していたフランスで受けた『*Nouvelles littéraires*』紙のインタビューの中で明言している。「残念ながらすでに廃刊してしまったが、メートル氏を主幹に発行されていた『日本と極東』という小雑誌に掲載されている素晴らしい短編をぜひともお読みいただきたい。チャーホフと同じくらい優れたものだ」¹⁷。事実、クロードルの蔵書には本誌が数巻残されている¹⁸。

日本の政治・社会情勢並びに国際関係に関する情報

総合雑誌を標榜した本誌にとって、文学作品の翻訳が唯一の関心事というわけではなく、論説、資料、時評、書評に関しても同様に掲載した。また、日本人の学者、ジャーナリスト、政治家にも発言の機会を提供しており、例えば、1921 年から 1922 年に総理大臣を務めた高橋是清は寄稿文「日本の対外政策の主要問題」の中で、日本の勢力圏及び、中国、ロシア、太平洋における「門戸開放」の原則を称揚しつつ、移住の自由、食糧・原料供給、軍縮といった当時の重要案件に関する政府の見解を紹介している¹⁹。

当時の重要な時事問題、社会問題も扱われていた。例えば、女性の地位、日本の対外政策、普通選挙、社会運動、政治状況、1923 年 9 月 1 日の関東大震災の被害と復興などである。日本の地政学的、外交的な動向も重要視されており、創刊号では、日本と米露二大国との関係についての記事が 2 本掲載されている²⁰。ひとつは 1921 年から 1923 年にかけてロシアとの政治・通商・軍事協定の締結のために難航を極めた交渉（とりわけシベリアにおける日本の権益維持）に関して、もう 1 本はワシントン会議で調印された条約（1921 年の太平洋地域の扱いに関する四カ国条約、1922 年の海軍軍縮条約）に関して書かれたものである。

こうした記事は全て、日本の新聞・雑誌といった一次資料に準拠しており、それゆえに『日本と極東』は極めて確かな情報を掲載する刊行物として成立しているのである。出典として明示されている新聞は 12 媒体を下らず、かなり驚異的なことには、それらは日本の世論の多様性を反映する意図をもって編集員たちによって注意深く読み解かれているのである。

この点で、本誌はフランス雑誌業界において傑出した存在であり、過去に例を見ないものである。探究の領域は広範に及び、政府の公式政策に関する情報だけでなく、例えば 1924

17 « Interview par Frédéric Lefèvre sur le Nô », *Les Nouvelles Littéraires*, 18 avril 1925, in Paul Claudel, *Supplément aux œuvres complètes*, t. 2, Lausanne, Editions L'Age d'Homme, 1991, p. 125.

18 クロードルの蔵書目録に記載されている『日本と極東』は 4 号、5 号、7-8 号、10 号（二冊）である。Catalogue de la bibliothèque de Paul Claudel, Annales littéraires de l'université de Besançon, Paris, Les Belles Lettres, 1979, p. 194.

19 *Japon et Extrême-Orient*, n° 2, janvier 1924, p. 103-115.

20 Eugène Vergnaud (Claude Maitre の別名), « Japon et Russie », *Japon et Extrême-Orient*, n° 1, décembre 1923, p. 6-23 et « Après les accords de Washington », p. 69-71.

年9月号の雑誌『マルクス主義』誌上で堺利彦が行なった「無産政党」結成の提案など、あらゆる政治的傾向から多種多様な意見をすくいあげ、その情報を提供しているのである²¹。日本の雑誌からの引用翻訳は、日本での発表後、数か月足らず、時にはわずか数週間というタイムラグで発表されており、当時、日仏間の情報流通がいかに迅速であったかを物語っている。

本誌はフランスに滞在する日本人研究者にも発言の機会を与えており、例えば若き民俗学者の松本信廣はその一人である。1924年、ソルボンヌ大学で博士論文を準備するためパリに到着、モースやグラネを始め、国立東洋語学校の安南語教授ジャン・プシルスキーの講義を受講。本誌上で、当時、学問として体系化されつつあった日本民俗学に関する非常に興味深い報告書（柳田國男、折口信夫、南方熊楠等の研究を紹介）を発表している。本誌はまた「新刊書紹介」欄で、文学、演劇、考古学、あるいは民俗学に関する最新かつ主要な日本の学術書の長文書評を展開している²²。



図6 1924年に日仏会館が設立された永田町の村井吉兵衛の別荘

結論

『日本と極東』は、主幹クロード・メートルの懸命な尽力の上に成立していた雑誌であり、彼は翻訳、政治・社会時評、日本の書物の書評まで別の筆名を用いたりして貢献した。1924年春、メートルは病に倒れ、1924年12月、本誌は創刊から1年で1000頁の誌面を世に出した後、無念にも廃刊を余儀なくされる。一方で、本誌を財政援助していた日仏両国のメセナ企業の側では、雑誌の方向性が文学に傾き過ぎ、経済問題が手薄であるという評価もあったようである。

日仏会館設立前夜に刊行された『日本と極東』は、日本の政治・外交並びに文化的な時事問題の一次資料による情報提供と同時に、歴史的な論考や現代文学の名作紹介を同誌面で扱ったという点で、その種のものでは唯一無二の雑誌である。情報にせよ寄稿者にせよ、その質の高さは、本誌の本格的な取り組み、独立性の証であった。例えば、寄稿者の中には日本学の主要人物も何名かいたが、彼らは両大戦間のフランスと米国における日本学の発展に非常に重要な役割を果たしていくのである。本誌はまた、フランスと日本の知的交流の性質が新しい段階に入ったことを示している：日本語の原資料の入手、そのリアルタイムでの普及、研究者の交流の促進、そして最後に「ジャポニスム」からの脱却。

日仏会館は、1924年12月に設立された。それは『日本と極東』の廃刊とまさに同時期で

21 « Le "Parti Proletaire" », *Japon et Extrême-Orient*, n° 9, septembre 1924, p. 193-194.

22 Matsumoto Nobuhiro, « L'état actuel des études de folklore au Japon » (Paris, octobre 1924), *Japon et Extrême-Orient*, n° 10, p. 228-239. 1928年、博士論文をベースに著書2作をパリで出版：Matsumoto Nobuhiro, *Le japonais et les langues austroasiatiques* (Librairie orientaliste Paul Geuthner), *Essais sur la mythologie japonaise* (Geuthner). 1930年、『日仏会館学報』にも柳田國男の研究に基づいて「炭焼小五郎がこと」という民間説話について論文を寄稿：Matsumoto Nobuhiro, « La légende de Kogorô le charbonnier (D'après un article de M. K. Yanagida) », *Bulletin de la Maison franco-japonaise* (t. II, n°3-4, 1930)

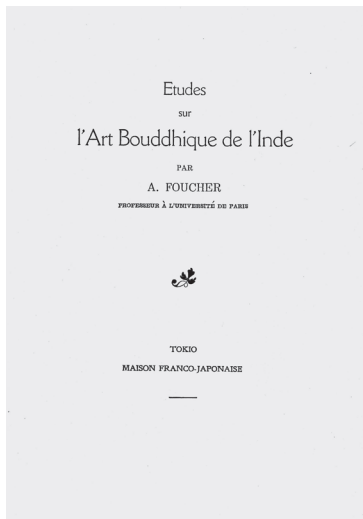


図7 アルフレッド・フシェ著『印度古代仏教美術研究』日仏会館編 1928 年刊

あり、フランス語による日本学の真の意味での黎明期と言っている時代である。本誌の創刊号ですでに言及されていた当館創立のプロジェクトは、最終号においても、創設間近の「フランス会館」（改名前の呼称）のために煙草商で篤志家の村井吉兵衛が私有の洋館を提供（図6）という短い記事の中で触れられている²³。1925年7月には、クロードを委員長にフランス外務省に「フランス会館フランス委員会」が設置され、そのメンバーとして、クロード・メートルもまたシルヴァン・レヴィ、ポール・ペリオと共に選出されることになるのである。

日仏会館は、本誌廃刊から2年後に学術活動をスタートさせ、フランスはここに日本学発展のための前進基地を得ることになる。こうした基地こそフランス極東学院に欠けていたものである。極東学院が日本に拠点を持つのは時を経て、60年代半ばを待たなければならなかったのである。日仏会館の研究成果は、1920年代の

後半から紀要や研究書の形で発表されていく。紀要としては『Bulletin de la Maison franco-japonaise / 日仏会館学報 仏文篇』、研究書の筆頭としては、1926年当時、日仏会館の代理学長を務めていたインド学者アルフレッド・フシェが日本の大学で行った連続講演をまとめた『Etudes sur l'art bouddhique de l'Inde / 印度古代仏教美術研究』（1928年刊）（図7）がある。この時期、着手されたもうひとつの出版企画が中国と日本の原典に準拠した仏教百科事典の『Hôbôgirin. Dictionnaire encyclopédique du bouddhisme d'après les sources chinoises et japonaises / 法寶義林』（図8）であり、1926年から初代学長シルヴァン・レヴィと当館の最初の研究員の一人である中国学者ポール・ドゥミエヴィルを発起人として企画がスタートした。

最後に、『日本と極東』、日仏会館、ギメ美術館の直接的もしくは間接的な繋がりについて触れておこう。アフガニスタンが専門の考古学者ジョゼフ・アカンは、1923年にギメ美術館館長に就任、その後1930年から1933年には日仏会館の三代目フランス人学長を務めた人物である。彼は任期中、アンドレ・シトロエン主催による有名な《中央アジア自動車横断》（Croisière jaune）の三班あった車両部隊の一班のリーダーとして参加している。彼がギメ美術館館長時代、副館長がクロード・メートルであり、『日本と極東』の誕生にも立ち会っている。館長としては、1924年5月、ギメ美術館フランス東洋友の会と共同で『Revue des arts asiatiques / アジア芸術』の

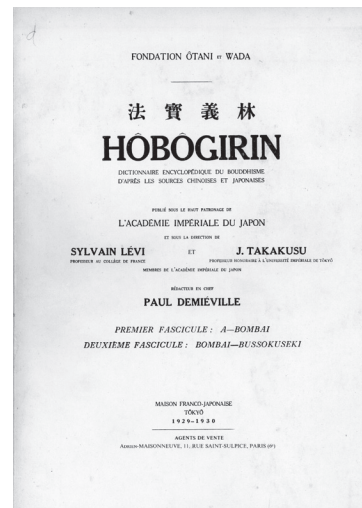


図8 『法寶義林』第一集、日仏会館 1929 年刊

23 « Un ami de la France : M. Murai Kichibei », *Japon et Extrême-Orient*, n° 11-12, novembre-décembre 1924, p. 393-394.

創刊に貢献した²⁴。今日でもアジア美術についてフランス語で書かれた唯一の学術的な刊行物として存在する本誌が、当時、日本美術の「学術的」研究の口火を切ったのである。エリセーエフは熱心な寄稿者であり、日本美術の歴史研究において「アマチュアリズム」からの脱却に貢献した。

1934年、エリセーエフは外務省付きの日仏会館委員会のメンバーとなる。1936年には『日本と極東』の精神を継承すべく、今では日本と東アジア研究誌の中で最も権威ある雑誌のひとつ『*Harvard Journal of Asiatic Studies*』の創刊に才能を注ぎ、ハーバード大学退官の1957年まで主幹を務めた。

『日本と極東』の刊行は、1920年代のフランスにおいて日本についての認識が転換期を迎えていたことを証明している。19世紀後半の約30年を通じて活気を呈していたジャポニズムが、第一次世界大戦後には下火になり始め、パリに集結していた日本美術の膨大なコレクションの大半がその頃からオークションで分散されていった。平行して、まだひと握りほどではあったが日本に精通する若い研究者世代が台頭し、当時、用語としても登場したばかりの「ジャポノロジー」が、学問の中心に躍り出ないまでも、正式な専門分野として形成され始めるのである。日本学者ジャン＝ジャック・オリガスの定義によると、日本学の先史時代、19世紀後半の先駆者時代に続く、日本学の第三の重要な段階が、この時期にスタートした²⁵。この段階の特徴として、後に日仏協力の拠点となる新たな機関の設立（1924年日仏会館、1929年パリの日本館、1934年パリ大学日本研究所²⁶）や、新たな講座（1925年ルーヴル学院の極東美術、1932年高等研究実習院の「日本の諸宗教」の歴史）の開講が挙げられるが、さらには同時代の日本への関心の高まりが顕著な時代でもあり、その対象は文学、芸術にとどまらず、政治や社会領域にも及んだ。その多岐にわたる日本への関心の高まりこそがこの短命で散った『日本と極東』の誌面を通して、くっきりと浮かび上がってくるのである。

翻訳：人見有羽子

24 『日本と極東』誌上でクロード・メートルは同誌の創刊を歓迎する一文を寄せている。Claude Maitre, « Une revue française des arts de l'Asie », *Japon et Extrême-Orient*, n° 6, p. 580-582.

25 Jean-Jacques Origas, « Les études japonaises en France. Cinq étapes : notes sur l'histoire et l'état présent », *Japanese studies in Europe*, Tôkyô, The Japan Foundation, « Directory Series VII », 1985, p. 79-102.

26 元・国民教育相でありパリ国際大学都市の創設者でもあるアンドレ・オノラの提唱により、三井合名会社の寄贈を得て設立され、日本館（薩摩財団）を所在地とした当研究所は、「フランスにおいて、日本という国、その歴史、制度、文学、芸術並びに国土の組成、資源や風土の多様性、国民の道徳的知的生活に関する知識獲得に寄与する教育を奨励すること」（原文：« de favoriser tout enseignement pouvant contribuer à faire connaître en France, le Japon, son histoire, ses institutions, sa littérature, son art, ainsi que la constitution de son sol, la variété de ses ressources et de ses aspects, la vie morale et intellectuelle de la population » (*Coopération intellectuelle*, n° 37, Société des Nations, 1934, p. 317)を目的としていた。シルヴァン・レヴィは1934年から1935年にかけて初代副所長を務めている。